道内産ハクサンシャクナゲの実生増殖法について

は　じ　め　に

近年環境整備のため家庭でも樹木の植栽がさかんである。しかし植えられている樹木のほとんどが本州産のため寒冷な気候である本道での越冬がむずかしく、失敗している例が多い。したがって本道向きの樹木を求めているのが現況である。筆者らは、本道で自生しているハクサンシャクナゲとエゾムラサキツツジの栽培方法を確立するため、1966～1970 年にわたり試験した結果、栽培技術も容易であり、量的にも大量生産できそうで、立派な苗木が得られることが明らかになったので報告することにする。

ハクサンシャクナゲ

概説

ハクサンシャクナゲは、北海道・本州中部以北の高山帯から亜高山帯にかけて分布していて、エゾシャクナゲともよばれているが、学者によっては淡紅色の花をつけるものにウスベニハクサンシャクナゲ、白いものにはシロバナハクサンシャクナゲと名付けている。また毛の多いものをウラゲハクサンシャクナゲ、少ないものをウスゲハクサンシャクナゲとよんでいるが、いずれもハクサンシャクナゲの変種として扱われている。自生地での開花は６月中旬～７月上旬で、樹下の湿度の高い弱酸性地を好む性質をもっている。

種子の採取と貯蔵

種子は 1965 年 10 月上旬に北見林務署管内で採取した。一花房に 12～13 個のさく(蒴)をつけており、採取したさくは黄褐色で先端がわずかに開きかけたもので大きさは 1.8～2.2cm 中は５室にわかれ 200～300 粒の種子が入っている。さく果は 15 日間の自然乾燥で完全に開き、1g あたり 5, 500～6000 粒のきわめて小さい種子が得られた。精選した種子はビニールの小袋に入れ＋２℃、湿度 40%の種子貯蔵庫に保存した。

まきつけ床

まきつけは木箱を使用した。木箱は縦 60cm 横 40cm、深さ 10cm とし底部は排水をよくするため小幅の板をはり、合わせ目を 0.6mm あけた。底に石炭がらの荒目のものを３cm の厚さに敷き、その上に水苔を２cm 入れてまき床とした（図参照）。水苔はざるでこまかくして芯をとりのぞき、５mm 目のフルイにかけて大きさを均一にしたものに熱湯をかけた。これは殺菌と、潅水による水苔の蘇生を防止し、さらに雑草種子の発芽をおさえるためである。処理した水苔は３時間放置してから使用した。

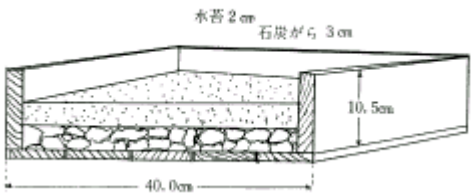


図　まきつけ箱断面

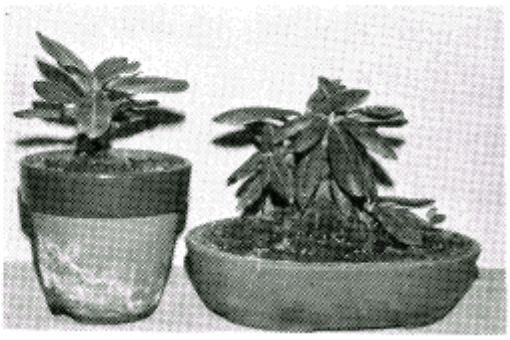
まきつけ

５月４日温室内で一箱あたり 0.4ｇまきつけた。まきつけにあたり、種子が小さいので石英砂の 0.1㎜のもので５倍に増量した。覆土は水苔を粉にしたものを種子がやっとかくれる程度にふりかけてからじょろで十分潅水し、乾燥防止のためビニールフィルムでおおった。

発芽から開花までの経過

５月４日にまきつけたハクサンシャクナゲは 17 日目の５月 21 日に一せい発芽した。発芽本数は一箱あたり約 2，000 本で、20 日目には２㎜程度の大きさに生長し、葉の色も黄緑色から緑色にかわった。 50 日目で 6㎜、84 日目には８㎜と生長し、第１回目の移植をおこなった。移植は間引をかねて大きいものからピンセットで抜きとり、まきつけ箱と同じようにつくった床に一箱あたり 81 本移植した。幼苗は水苔一ぱいに細根を張っているため、移植してからも衰弱することなくただちに生長をつづけた。移植して２年目には苗長も 1.8～2．0㎝と伸長し葉も８～９枚となった。３年目には４～５㎝になり圃場へ移植したところ箱植のときより樹勢もよく苗長も 20㎝、葉も 16～18 枚となった。５年目には 20～22㎝の大きさとなり葉も 28～34 枚となってシャクナゲらしい樹型となり、生長のよいものはまきつけてから５年目で最初の開花をみた。

写真－１　ハクサンシャクナゲ　３年生



写真－２　ハクサンシャクナゲ　５年生

管理手入

温室内でまきつけたものは一週間でビニールをはずしてから毎日一箱あたり 0.5㍑の潅水をおこなった。温室内は高温多湿のため病気発生も予測されるので月２回ボルドー液の散布をした。施肥は発芽じて 10 日目にプラントワード 800 倍液を 0.2㍑施し、10 日おきに同量を追肥した。移植してからは増量し一鉢あたり 0.4㍑、圃場に移植してからは１㎡あなり 1.6㍑を月１回追肥した。また病害は主として立枯防止のためウスプルン 1,000 倍液を 20 日に一回の割で散布した。さらにアブラムシ、アカダニの発生をみたが、アカダニはネオサツピラン 1,000 倍液で、またアブラムシはマラソン 1,500 倍液で防除した。なお圃場に移植した苗木は直射日光を防ぐため寒冷紗を地上 40 ㎝の高さに設置した。

エゾムラサキツツジ

概説

本道で、他の花にさきがけて春を待ちかねたように咲く花はエゾムラサキツツジである。この花はゲンカイツツジの系統ともっとも近く、研究者たちはおそらく同一種が北と南にわかれで固定されたものだろうとのべている。丈夫な半常緑樹で寒さにつよく、自生地は樹林下の日蔭に多いが、山採りして日当りのよいところでもよく生育して、適応性のつよい花木である。花の色は桃紫色であるが同じ性質をもつもので白花があり、シロバナエゾムラサキツツジともいわれている。前者は本道ではひろく分布しているが、後者の白花は北見、十勝、日高のほんの少ない地域にわずかに存在している。

種子の採取と貯蔵

種子は10月上旬に採取した。さくは9～10㎜の大きさの円柱形で５室からなり、一さくには200粒前後の種子が入っていて１ｇあたり8，500～9，000粒と多い。種子の調整および保存はハクサンシャクナゲと同様にした。

まきつけ床

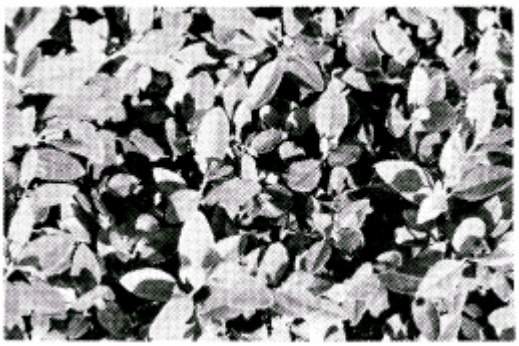
まきつけ床はハクサンシャクナゲと同様にした。

まきつけ

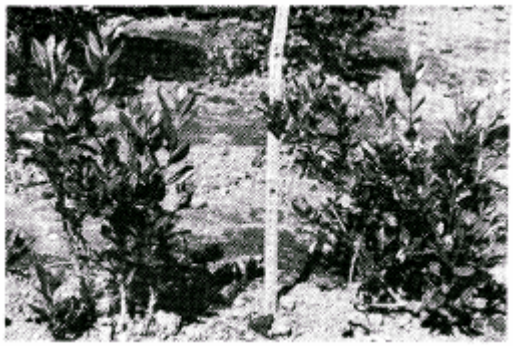
５月４日一箱あたり0.3gの種子を準備し、まきつけは種子が小さいのでハクサンシャクナゲ同様増量してまきつけた。覆土、潅水、および追肥も同じ方法でおこなった。

発芽から移植までの経過

５月４日にまきつけたエゾムラサキツツジは17日目の５月21日から発芽をはじめ、一箱あたり2，500本前後の発芽をみた。７月22日の移植時には１㎝、８月25日3.2㎝に達した。移植して２年目には８㎝になった。移植は毎年春に行ない２回目までの移植は水苔を使用したが、３回目は圃場で平床１ｍ幅のところに1㎡あたり64本の割で移植し、土壌は追分産の火山砂４・ピートモス３、圃場の作土３の割合とした。移植してから４年目には30～35㎝に達し、生気のよいものは最初の着花をみた。



写真－３　エゾムラサキツツジ１年生



写真－４　エゾムラサキツツジ３年生

管理手入

管理手入はシャクナゲと同様としたが､エゾムラサキツツジにはアブラムシの発生をみたの、エカチンの 2，000 倍液を噴霧して防除した。

考　　察

ハクサンシャクナゲ・エゾムラサキツツジはともに浅根性で細根の多いことがわかった。二者め栽培で難かしいのはまきつけてから２回目の移植までであるが、温室内での栽培では潅水にもっとも注意を要する。今回用土として水苔のほかピートモス、あるいは水苔とピートモス混合もおこなったが水苔のみの成績がよかった。なおエゾムラサキツツジについては直接、圃場でまきつけしたところ温室内と大差のない結果をえたので露地まきでもよいことがわかった。この場合の用土は火山砂とピートモスを７対３の割合で用いた。ハクサンシャクナゲの露地まきについては現在検討中である。

お　わ　り　に

従来ハクサンシャクナゲ・エゾムラサキツツジの養苗は、大部分が山とり苗木でおこなわれていたが、実生により４～５年で開花し、しかも価値の高いものがえられるので、実生による増殖を推奨したい。さらに進めて優良母樹の選抜、他の系統との交雑による新品種の開発を研突課題としたい。

(樹芸樹木科)